

ハレルヤ！～歌う人々～

年末になると世の中には歌があふれます。
クリスマスソング、「第九」、紅白歌合戦、年越しコンサート等々。
もはや年中行事と言っても過言ではありません。
なぜこんなにも広まったのでしょうか？
その由来とともに、歌う人々の想いにふれてみてはいかがでしょうか。

日本と「第九」 ～ その始まり ～

「第九」と言えば、ベートーヴェンの「交響曲第9番」を指すほどに親しまれた曲です。オーケストラに合唱が加わる第4楽章の「歓喜の歌」（喜びの歌）は、実際に歌った経験のある方も多いでしょう。

これほど浸透した「第九」ですが、どのようにして日本全国に広まったのでしょうか。元々はドイツの年越しコンサートで「第九」が演奏されているのが日本に持ち込まれ、年末のオーケストラの書き入れ時に演奏したり、ラジオで放送するようになったとの説があります。

また「初演」については様々な主張があったものの、現在では1918年6月1日、徳島県の「板東俘虜収容所」でドイツ軍の俘虜たちによる演奏が「初演」ということになっているようです。

（参考：「文化としての日本のうた」佐野靖・杉本和寛／編著 東洋館出版社）

「第九」と日本出会いの歴史—板東ドイツ人俘虜収容所の演奏会と文化活動の記録—
ニコレ・ケンプケン／著 ベートーヴェン・ハウス ボン／編
ヤスヨ・テラシマ=ヴェアハーン／訳 大沼幸雄／監訳 彩流社



第一次世界大戦後、徳島県の「板東俘虜収容所」では、千人以上の規模でドイツ人俘虜が収容されていた。元の職業を生かした俘虜たちによる商店街の運営や新聞の発行なども行われ、地域との交流もあったという。

中でも盛んだったのが音楽活動で、軍楽隊の優れた指導者に恵まれたこともあり、オーケストラや吹奏楽団、合唱団がそれぞれ二つもあったという。本書には多色刷りのプログラムや評論、舞台背景や衣装に至るまで多数の写真が掲載されており、俘虜たちの音楽にかける情熱が伝わってくる。

第九「初めて」物語 横田庄一郎／著 朔北社



板東俘虜収容所における「第九」の初演は、他の収容所の俘虜たちや、音楽好きの上流階級の人々にも衝撃と感動をもって受け止められた。一方、初の日本人による「第九」全曲演奏は、それから六年後の1924年11月29日に東京音楽大学で行われた。「関東大震災から一年、この第九演奏会は、復興の喜びと希望の象徴だったのかもしれない。」（本文より）この演奏会で使用された楽譜や楽器を提供したのが徳川頼定侯だが、同氏は、板東での「第九」初演の報を聞いて駆けつけたほど熱心な音楽支援者で、著名な海外の演奏家や作曲家とも交流があったという。当時の音楽界にはこうしたパトロンたちの支援が欠かせなかったようだ。

初演を主張したのは東京音楽大学だけではない。九州帝国大学の「九大フィル」でも1924年11月26日、当時の皇太子（のちの昭和天皇）の御成婚に伴う演奏会で「第九」の第四楽章を合唱付きで演奏した、というプログラムが残っている。（ただし音曲は第九でも、歌詞は「文部省撰奉祝歌詞」であった）「市内各学校十四団体を集めた二〇〇名の合唱団」による空前の演奏であったという。

他にも、日本人が初めて指揮をした、板東以前に海外で「喜びの歌」を初めて歌った日本人歌手がいる、など、さまざまな「初めて」の形があるが、これらのエピソードの全てに、「第九」と同じく苦難を乗り越えて歓喜に至る物語がある。

番外編～「歌う〇〇」たち～

歌う国民 ―唱歌、校歌、うたごえ― 渡辺裕／著 中央公論新社



今でこそ「唱歌」や「童謡」は日本の懐かしい心の歌であり、クラシックなどの音楽は「芸術」として尊重される傾向があるが、昔の日本では必ずしもそうではなかったらしい。

「唱歌」の始まりは、明治政府が「国民づくり」のため、近代的な制度や思想、知識などを歌にして覚えさせるものだった。そのため「夏季衛生唱歌」や「郵便貯金唱歌」など、タイトルも歌詞もかなり即物的で、今なら吹き出してしまうような歌が山のようにあった。これに対し、山田耕作や北原白秋が情操教育を掲げて童謡運動を広めたが、これらが一緒くたに「心の歌」化された現象は、「ノスタルジーのヴェールがかぶさるような形で変容を被ってきた結果」だと著者は説いている。

「歌は世につれ世は歌につれ」の言葉どおり、歴史と文化を歌から読み解ける一冊。

「耳に残るは君の歌声」リリー・ポッター／著 野沢佳織／編訳 角川書店



フィグレ＝小鳥という名のユダヤ人の少女がいた。ロシア革命の戦火から逃れ、イギリスへ送られた少女は「スージー」という新しい名で呼ばれるようになる。一度は心を閉ざしたスージーだが、その歌声を見出されたことで、少しずつ前を向いて歩み始めた。かつてアメリカへ渡った父を探すため、コーラスガールになる道を選んだスージー。興行で渡ったパリで出会ったものは…。

「歌う鳥のキモチ」石塚徹／著 山と溪谷社



繁殖期のオス鳥はガンガン歌う。なわばり宣言で高らかに歌い、傍に寄ってきたメスにはつぶやき声で「君だけに」と歌いかける。オスの歌にはご当地ソング（よそ者を見分ける）、種族特有の鳴き方（混合地帯で他の種と誤交配しない）など様々な情報が盛り込まれているが、曲のレパートリーが多いほど防衛力が高く、そして複雑な歌ほどメスを引き付ける。「歌の上手なオスはモテる」とは鳥の世界の常識であるようだ。そして、メスの抱卵中は小声になるものの、すきを見て他所で二人（羽）目の嫁さん候補を探しては、高らかに歌っちゃうのも、「できる男」のしるしなんだとか…。

いかがでしたでしょうか。残念ながら紹介しきれなかった本には、「第九交響曲 ニッポン初演物語」「歌う船」「歌うネアンデルタール」「さえずり言語起源論」などがあります。気になるタイトルがありましたら、ぜひお手に取ってみてください。書架にない場合は、カウンターにお声掛けいただければ取り寄せいたします！

令和3年12月

編集・発行：さいたま市立与野図書館

さいたま市中央区下落合5-11-11

TEL 048-853-7816 FAX 048-857-1946

